

で賛成決議をあげるだけの説得力をもたなかつたのである。

以上のことからは、公民館決議は、内部での結束を固めるとともに、自分たちの地元認識を行政に認めさせるための装置として働いたということができる。

#### 四 白保住民にとっての地元

前節では、白保住民と行政の相互作用の分析<sup>一</sup>をとおして、行政が白保を「地元」として認めざるをえなくなつた過程を明らかにした。ここでは、白保住民にとって、公民館決議をあげる際の基準になるような生活感覚とは、どのようなものだったかを明らかにしておきたい。すなわち、白保住民が、条文に規定されていないにもかかわらず、なぜ自分たちを「地元」と強く主張することができたのか、その力の根源について考察をすすめる。

白保住民にとって、最初から、地元に関する明快な認識があつたといえる。白保住民にとって、新石垣空港建設の地元とは白保部落をのぞいてはありえなかつた。それは、戦中戦後の体験にもとづいた、絶対的な地元認識があつたからである。このことは、白保住民の次のような言葉から読みとることができる。

「去る大東亜戦争のため、部落の近くに飛行場があつたため戦争が激しくなつたので避難命令が下り、山中に追いやられ、慣れない山中生活のため家族全員親子七人がマラリヤでたおれ、枕を並べてしまつた。主人は召集され、女一人の身で、米はなし、いもはなし。ソテツの実にかじりつき東の海に出て海藻をとり貝類をとり、毎日のように海あさりに出、戦後の苦しい食糧難を生き抜き、ようやく家族は健康をとりもどし、生き延びてきたのです。当時の苦しみを思い出すと身震い、いやな感じになり、この海がなかつたらすでに死んだ身であつただろうと、狂うほど私にとってはこ

の海は命の母だ、宝だ。絶対つくらせてはならない。新空港建設絶対反対。命とりの空港だ。断念せよ。断念せよ。  
（一九八八年四月二十七日に県が公表した環境アセスメントに対する白保住民の意見書より）

白保には戦時に陸軍飛行場があり、空襲、艦砲射撃あるいは日本軍による労役や食料略奪など、白保住民はたいへん苦しい体験をした。山中に避難してマラリヤにたおれた住民も多かつた。白保住民にとっての地元とは、空港建設によって最も被害をうける地域住民のことだったのである。

言い換えると、白保住民にとって、「地元」とは、土地との直接的なむすびつきを表現する言葉であつた。開発計画に対し、地域住民は、土地との結びつきの固有性と直接性から反対にたちあがるのであつて、普遍的な価値や論理から行動をおこすのではない。そのことを住民の一人は次のように語る。

「たとえばここにといったら、白保地区でしょ。白保地区につくるということになるとね、白保人は、ただ白保としてどうするかということしか頭にないよ。市がどうする県がどうするではないよ。ああここに空港をつくらせたら白保としては大変だということになるよ。」「法律的なことを全く知らなくても、直接、地域に住む住民が、地元といえるのじやないかとぼくは思うさ。考ふ出す場合だれでもそうよ。だれでもよ。白保人として白保地区に、ここに飛行場をつくるらしいよといつたら、ああ大変さと、いうのはね、白保だから大変だ、さあ、という発言だと思うさ。」

地元という言葉が地域住民によつてもちいられるときには、自らの生活と土地（自然環境）との関係性が示されている。農業、漁業という日常の労働をつうじて、「土と共に生きてきた、海と共に生きてきた」と語るとき、白保住民が抱いているのは、生活をとおして形成された環境イメージである。法によつて個々の権利者として規定されていなくとも、行政に対して地元として利害関係を主張するのは、この環境イメージにもとづいているといえる。地元という言葉をもちいて白保住民によつて語られる自然環境は、「自然保護」の対象となるような実体化された自然ではなく、自分

たちが生活してきた白保の土地という意味であり、生活の実感に支えられたものということができる。

「毎日の生活のなかに歴史的に、ひとりひとりの部落民の中に根強く、海との関係が焼きついているということが大きな力だと思うんですよ。だから、大事な海との関わり、これを断ち切るような新空港、轟川を中心に南北に走る新空港、これを白保の心臓部のなかにぐさりといれること自体、もうまさに人間の心臓部に急所をついてきたという痛みをほんとうにひとりひとりが強く感じた。ここに立ち上がったのが部落の十数年の忍びの闘いであつたと思いますよ。言葉では言い尽くせない部落民と海との関わりの生活というものが、強く部落民の生活のなかに刻まれてきたということがあるわけですよ。」

一方で、自分たちが地元であるという明快な認識は、すでにみたように白保公民館の総会決議という形をとつて表現される。住民が日々の生活のなかで形成してきた生活感覚や環境イメージは、もつとも有力な地域住民組織である公民館の総会決議という装置を経て、いわば「公認」され、部落の対外的および対内的な規範としての力をもつといってよいだろう。<sup>(15)</sup> ところで、白保公民館総会での反対決議は、全員一致という形式で行なわれる。「全員一致」というのは、多数決か全員一致かという採択方法のレベルの問題ではなく、各自の生活体験を再確認し、お互いに「意気投合」することである。つまり、公民館総会の場において「意気投合」することをつうじて、住民各自の生活体験が束ねられ、「部落とともに生きてきた」と白保住民が語るような部落の「公」が形成されるとみていいだろう。このことは、リーダーの一人による次の言葉によく表れている。

「ぼくはあんまり頭にね、大きなことを夢を見たような感じのものの言い方をしないわけよ。日頃から生活しながら感じていること自体がね、全部の頭の中にあるんじやないかなと思つてはいるわけよ。私が思つてはいるようのある人も思つてはいると思う。生活している立場から見る場合。ああいなところをね、私は自分の感じているのをぱつぱつと言つうか

ら、相手もそういう生活の中で感じていることがあるから、私のいうことが合致するでしょ、自分の思つてはいることがばーと合うでしょ。私の言う言葉に対してね、こう一緒にまなこが光つて集中してくるという感じがね、私が話するごとにそういうな感じをつよく受けるわけさ。そうすればほんとに全部が心をひとつにばーと無言のうちに固まるような感じがするわけさ。」「私が言つてること自体は、部落民のね、地域住民のひとりひとりが生活の中で強く感じとつてることに対して、一致した考え方方が私が訴えることによってはつきりと出てきて、それが意気投合したことなんですね。賛成じゃない。私がいつたことに賛成というよりかはね、賛成といったら私はちょっと弱いような感じがする。そうな生活の中で日頃からほんとに思つてることを私が提言して、それに意気がね、考え方方が統合した、あわされたと、ここに大きな力があつたと私は思うんです。そういうものがなければ、おそらく白保の闘いというのはここまでつくれないと思うんです。」

また、白保住民にとって、市議会決議は「ひとりひとりの思いの浸透しない」ものなのだが、公民館総会における全員一致の決議は、その場にいあわせた者たちが互いに誓約しあうことであつた。そして、自分たちの生活感覚の表明である「地元の同意」は、市議会決議で表されるようなものでなく、公民館決議によって示されるものだつた。

「結局決議というものはお互いの思いを結んだ中の堅い約束だということがいえると思うさ。：部落の決議は市議会とは全然違う。白保の決議というのは、その思いの人が全部集まつてきて誓い合うということですよ。だからひとりひとりに浸透している約束だからね。：だから強くもいえるわけ。思い思いを結びつけるということは契約する、誓い合うということだからね。それが、部落の決議というものの重さ、大きな強みだといえる。」

白保住民は自分たちの反対運動を「生活をとおしての闘い」「部落ぐるみの闘い」と語つてきた。この「生活をとおして」や「部落ぐるみ」という感覚が、公民館総会の場をつうじて繰り返し確認され、絶えず部落の「公」を創り出し

ていくのである。次の語りは、白保住民が感じる「公」について、よく表しているので少し長いが引用しておきたい。

白保住民は、公民館での集まりの場には部落の祭事の場にも共通するような何かがあると感じているのである。

「豊年祭のとき、弥勒が歌とあわせてくるでしょ。あのときは、誰もしやべらんでしょ。無言のなかにね、非常に沈痛な思いがして、しまいには涙が出るような、喜びというかな、そういう感じで迎えるわけよね。誰も語つていよいよ。しゃべつていよいよ。というのは何かといつたらね、日頃から自分の思い詰めている生活のなかから、弥勒を見る場合、これがばっと頭に出てくるわけよ。たとえば農業して米を収穫する、あるいは粟を収穫する、いろいろ農作物を収穫するまでの人間の生活のなかでの苦労、喜びというものがあるでしょ。…これがありありと頭のなかにね、ひとりひとりに浮かんでくるわけさ。ぼくもそうよ。ああいなおかげで今日の喜ばしいこの世界富（ユガフ）を迎えることができたなあ、という感じで弥勒を迎えるから、自然に涙ができるわけよ。…そのときの農民の、今日のこの大事な収穫を迎えるまでの苦労というものをね、ありありと頭に思い浮かべながら、迎えるからよ。…悲し涙じやないんだよね。ほんとに喜ばしい涙が出てくる。だから弥勒を迎える場合、沈痛な思いがするわけさ。…だから手をひけ恐ろしい自分で考えきれない力というものがね、ぐーと出てくるわけさ。思いというものがね。ああいな生活のなかから漏出でてくる思いというものはよ、これはもう何とも言えないよ。だから、空港の闘いでもよ、我々の闘いでも、悩みの闘いというのはあるわけよね。警察がくるといったらね、ほんとこわいだろ。嫌気がさすでしょ。だけども手をひけないわけよね。かみつかんといかんわけよね。ああいなものは、日頃自分の生活というもののなかから出てくるから、かみつかんといかんという大きな勇気がでてくるわけさな。…ああいなことが白保の闘いにはひとりひとりにあつたということよ。」

以上の語りからは、次のふたつのことが指摘できる。

白保住民の地元認識は、自らの戦中戦後の困難な体験や「明和の大津波」という部落の伝承によって、あるいは実際の海の利用によって裏打ちされた明快な環境イメージをもとに形成されている。「海は部落の命である」「海なくしては白保部落はありえない」と白保住民に語られる海との関わり方が、「地元」という言葉によって表現されているのである。このように地域住民の地元認識は、生活をとおした自然環境認識であると理解できる。

地域住民と行政との相互作用をつうじて地元が形成される過程で重要なことは、地域住民が自らを地元と認識する明快さである。その前提には、誰がなんと言おうと地元とは自分たちである、という住民の強い信念が不可欠である。白保では、日常の生活体験によって形成されてきた生活感覚が共有されていったからこそ、空港問題に立ち会ったときに、部落全体が自分たちを地元と認識することができたのである。

次に重要なことは、このような個々の生活体験に裏打ちされた環境イメージが、公民館という装置をつうじて組織化されるとのことである。白保では、公民館決議をつうじて住民の個々の生活体験が共有され、部落の「公」が創り出されていった。公民館で「意気投合」することによって、個々の住民の環境イメージが束ねられ、それが行政に対しても自らを地元と主張する力となつたのである。

新石垣空港建設計画における地元の同意  
新石垣空港計画における事例研究をつうじて、地域住民と行政とのあいだの相互作用をとおして、地元が形成されてくる過程を考察した。

## 五 結 論

執筆者一覧（執筆順）

嘉田 由紀子	琵琶湖博物館企画調整課 近畿大学農学部助教授
池上 甲一	関西学院大学社会学部社会学研究科 研究員
藤村 美穂	中京大学社会学部助教授
古川 彰	高知大学人文学部教授
大野 晃	弘前大学農学部助教授
渋谷 長生	関西学院大学社会学部社会学研究科 前期博士課程修了
家中 茂	日本大學生物資源科学部専任講師
清水 みゆき	滋賀大学経済学部助教授
宇佐美 英機	茨城大学農学部助手
安藤 光義	新潟大学人文学部助教授
佐藤 康行	神戸大学文学部教授
北原 淳	前期博士課程修了

年報 村落社会研究 第32集  
川・池・湖・海 自然の再生 21世紀への視点

1996年10月25日 第1刷発行

編者 日本村落研究学会

発行所 社団法人 農山漁村文化協会  
郵便番号107 東京都港区赤坂7丁目6-1  
電話 03(3585)1141(営業) 03(3585)1144(編集)  
FAX 03(3589)1387 振替 00120-3-144478

ISBN 4-540-96091-1 印刷 / 三和印刷  
(検印廃止) 製本 / 石津製本  
© 1996 定価はカバーに表示  
Printed in Japan

Annual Bulletin of Rural Studies Vol. 32

Published by Japanese Association for Rural Studies

Contents

**Special Issue : Rivers, Ponds, Lakes and Seas : The Very Core of Nature's Regeneration towards the 21st Century**

〈Paper〉

- Kada, Yukiko : "How to Approach to the Environmental Problems from the Rural Society Study"  
Ikegami, Koichi : "Semantics of Farmponds as 'Citizens' Commons' —Its Possibilities and Person's Assessment"  
Fujimura, Miho : "Nature as social relations"  
Furukawa, Akira : "The Change of Village Autonomy as Environmental Management and Social Structure : A Study of a Village Diary"  
Ohno, Akira : "Upstream Mountain Villages and the Issue of Public Support"  
Shibuya, Chousei : "The Change in the Environmentally - Sound Agriculture and Cooperation between the Agri - coop and the Consumer's coop"  
Yanaka, Shigeru : "Agreement of 'Jimoto' on the New Ishigaki Airport Construction Project"  
Shimizu, Miyuki : "Relations of village communities to the anti-pollution movement during the process of the modernization in Japan: In the cases of Ashio and Besshi"

〈Surveying Rural Studies of Disciplin〉

- Usami, Hideki : Trends in History and Economic History  
Ando, Mitsuyoshi : Trends in Economics and Agricultural Economics  
Satoh, Yasuyuki : Trends in Sociology and Rural Sociology  
Kitahara, Atushi : Trends in Foreign Country Studies (Asia)